

11 南北朝の医家徐氏の系譜

猪飼祥夫

南北朝の医学は混乱した政治的背景によって、それぞれの独自性を発揮した処方と過去の経験を集成した時代であった。理論的には漢代の医学を受け継ぎ、臨床的には独自性と臨床経験の集積がはかられた。一般の医者自身は低いものであったが、門閥貴族によって行われた医療は、彼らの世襲的な地位と身分に保証された趣味と実用を兼ねた医学であった。彼らが医学を学ぶ契機には、自らと自分の家族や一族の病気のためということが一番多かった。おおむね彼らの医学は一族のためか、医学によって懇意を得るためにしか用いられなかった場合が多かった。

医療を行った門閥貴族の中で東莞の徐氏は非常に有名

な一家である。『隋書・経籍志』には、徐之才に『徐王八世効驗方』十巻という書があるといっている。彼までにすでに医家として八代を数えたことになる。

『南史』によれば、徐氏の医学は徐熙から始まる。熙の字は仲融、本は東莞の人、濮陽太守となり、丹陽に移り住み、ついでまた錢塘の秦望山に隠居した。黄老の学を好み、医術に精しいという。子の秋夫は鍼灸で有名で、鬼の腰痛を治した話が伝わっている。秋夫の子は道度、叔響である。ともに医術に精しい。道度は蘭陵太守となり、叔響は太山太守及び大將軍參軍になっている。医学書をたくさん撰述した。

道度の子は文伯、東莞大山蘭陵三郡の太守になる。本草と婦人科に精しかった。著作も豊富である。文伯の子は雄、齊の員外散騎常侍となる。医術は南方で非常に有名であった。子供は七人あり、徐之才が最も有名である。叔響の子の嗣伯は正員外郎諸府佐である。治療は貴賤に限らず多くの人をみて、効果が高かった。著書もあった。

北朝の徐氏は徐審に始まる。徐審、字は成伯、兄の文伯らとともに、皆医薬のことを善くすると、『北史』にあ

る。徐睿の子は踐、字は景昇、官位を継ぐという。位は建興太守である。徐之才とは梁に仕えていたが、のちに洛陽に至り、魏帝の寵愛を受け政治的にも活躍した。『北斉書』に彼の伝記が有る。之才の弟、徐之範も医学で活躍した。

この論攷では徐之才墓誌（趙萬里『漢魏南北朝墓誌集釈』）と徐之範墓誌（『文物』一九八七年十一期）と徐之範の子の徐敏行墓誌（『文物』一九八一年四期）から南北朝の徐氏の系譜をたどる。これらの墓誌から徐氏の伝来が明確となり、さらにこの三人の子供たちや相互の関係がよくわかる。徐氏が後漢の徐防の後裔であるという記載もこの一族の出自を知るために重要な視点になると考えられる。

徐之才の墓誌には当然あるべき医学の記事がない。彼が医療によって懇意を得て政治的に活躍したことから考えても、また知られている医学著作のうえからも不思議なことである。『中国医学大辞典』中に徐之範の子、徐敏行というものをあげている。徐之範の墓誌には十二人の子供の名前が列記されているが、敏行の名称は見えず敏行のことかと考えられる。

南北朝の徐氏の系譜をたどることによって、この一族が医学史上にはたした役割と、この時代に門閥貴族によって行われた医療の特徴を考えてみたい。

（猪飼針灸）